平成 23 年 (2011)10 月 31 日

5号

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌　年２回発行

平成 22 年度の主な発掘成果から

平成 ２２年度に市内で実施した埋蔵文化財発掘調査では多くの成果がありました。

弥生時代では、中河内を代表する拠点集落の亀井遺跡で、弥生時代前期～中期(前３～２C)の居住域が見つかりました。市東部の郡川遺跡では、新たに弥生時代前期後半(前３C)の集落が確認された他、弥生時代後期の集落が東高野街道付近を中心に広がることがわかりました。

古墳時代初頭～前期前半(３C)では、成法寺(じょうほうじ)遺跡、小阪合(こさかあい)遺跡で竪穴住居や井戸が見つかりました。遺物には、山陰・四国・東海地方の外来系土器が多数含まれており、当時の活発な地域間交流が窺えます。そのほか、西郡(にしごおり)廃寺では、古墳時代後期後半(６C後半)以降の居住域が見つかりました。周辺に存在した西郡廃寺の造営氏族の動向や寺院周辺での集落推移が推定されます。

平成22年度の主な発掘調査地点

中河内最大の拠点集落

亀井遺跡〈第 15 次調査〉(南亀井町二丁目)

弥生時代前期～中期(前３～２C)を中心とした集落域の一部が見つかりました。亀井遺跡は弥生時代の全時期を通じて、中河内を代表する拠点集落であったことが明らかにされています。今回の調査地点は居住域の中央部分にあたり、安定した長期間の集落推移を示すように約 0.5mに及ぶ遺物包含層が認められ、出土土器も膨大な量におよびます。これまでの調査で、弥生時代中期に集落規模が拡大し、集落を囲む多条の溝の存在から環濠集落であった可能性が考えられています。

弥生時代中期の亀井集落の推定範囲

弥生時代前～中期のムラの跡

目次　◆平成２２年度の主な発掘成果から(１～３)　◆考古学よろずコラム第５回　久宝寺遺跡出土の韓式系土器(３～４)
◆イベント案内/編集後記(４)

生駒山地西麓部で弥生時代の前期と後期のムラを発見！

郡川（こおりがわ）遺跡〈第10次・11次調査〉（郡川三丁目、教興寺四丁目）

郡川遺跡の第 10 次および第 11 次調査で、弥生時代前期(前３C)・後期(２C)、古墳時代前期(３C)と奈良時代(８C)の遺構・遺物が見つかりました。

第 11 次調査で見つかった弥生時代前期(前３C)の居住域は、生駒山地西麓部の弥生文化の成立期から波及期の様相を知るうえで貴重な資料です。第 10 次調査では、弥生時代後期(２C)の井戸３基ほかが見つかり、調査地付近が居住域の中心であったことが分かりました。第 10 次調査の南部で行われた調査では、同時期の集落域が見つかっており、東高野街道に沿った付近に弥生時代後期の居住域が東西約 50m、南北約 200mの範囲に広がっていたことが分かりました。

弥生時代後期の井戸が見つかった様子

邪馬台国時代のムラ跡から外来系土器を多数発見！

小阪合（こざかあい）遺跡〈2010－105 調査〉（青山町三丁目）

古墳時代前期前半(３C後半)の井戸などの居住域に関連した遺構・遺物が見つかりました。

この時期には、遺跡範囲の中央部を「小阪合分流路」と呼ばれる河川が流れていました。「小阪合分流路」は当時の主要河川で、市域の北部に存在した河内湖に注ぐ大規模な河川でした。また上流部では、邪馬台国時代に中心的な役割を果たした大和盆地南東部とを繋ぐ重要な水上交通路でありました。

小阪合遺跡を含むこの河川流域の遺跡群は「東郷・中田遺跡群」と呼ばれ、古墳時代初頭～前期前半(３C前～後半)にかけて数多くの集落がつくられました。

今回の調査で見つかった山陰・四国・東海地方の特徴をもつ外来系土器は、邪馬台国時代の地域間交流や社会情勢を物語る重要な資料です。

東海地方(愛知県)を中心に分布する甕

小阪合分流路について

近年の発掘調査により、古墳時代初頭～前期には、現楠根川の流路に沿って「小阪合分流路」と呼ばれる大河川(川幅約 150m)が存在していたことが分かってきました。この時期は大和盆地南東部を中心に邪馬台国が成立した時期で、中河内地域においても集落が爆発的に増加する時期にあたります。したがって、この時期の八尾市域一帯の遺跡群は、これらの河川を媒介として西日本各地と邪馬台国を繋ぐ「人」「物」「情報」の中継地的な役割を果たしたものと推定されます。

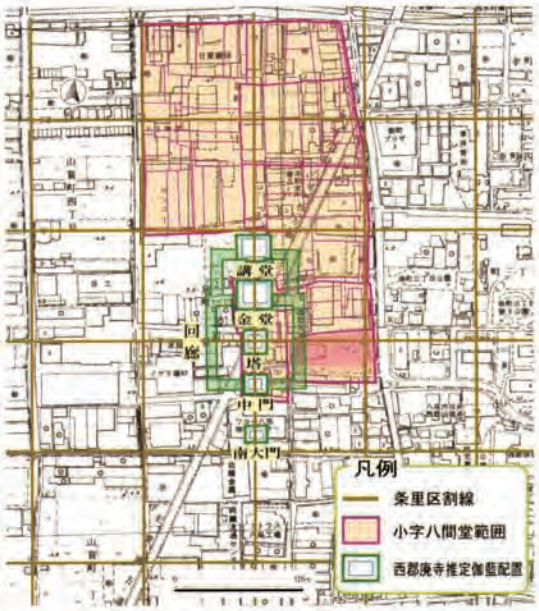
幻の西郡廃寺はどこに！

西郡廃寺＜第７次調査＞（泉町三丁目）

西郡廃寺は飛鳥時代中期（７Ｃ中）から鎌倉時代（13Ｃ）にかけての古代寺院です。錦などの織物を織る百済系の氏族「錦部連」の氏寺と考えられています。泉町二丁目の西郡天神社境内に塔心礎（府指定有形文化財）が残され、周辺の調査では、瓦類が見つかっています。

今回の調査では、古墳時代後期後半（６Ｃ後半）と平安時代末期～鎌倉時代中期（12Ｃ後半～13Ｃ後半）の遺構・遺物が見つかりました。古墳時代後期後半（６Ｃ後半）の居住域は、飛鳥時代中期（７Ｃ中葉）に創建された「西郡廃寺」の造営氏族である錦織氏との関係が推定されます。平安時代末期～鎌倉時代中期（12Ｃ後半～13Ｃ後半）の集落は「西郡廃寺」の存続時期を考えるうえで注目されます。

西郡廃寺の塔心礎
（西郡天神社境内）
〔大阪府指定有形文化財〕



西郡廃寺周辺の条里区画と推定伽藍配置

考古学よろずコラム 第5回

八尾市出土の主な遺物や遺構を紹介します。

久宝寺遺跡出土の韓式系土器

坪田真一＜財団法人八尾市文化財調査研究会＞

韓式系土器とは、朝鮮半島からもたらされた土器、あるいは渡来人および在地の者が日本で製作し、彼地の土器の特徴を如実に表す土器の総称です。

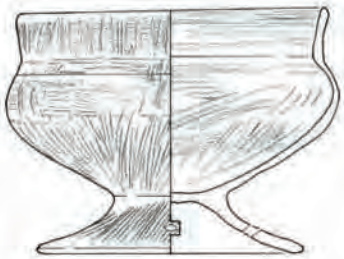
今回紹介する２点の韓式系土器（１台脚付短頸壺・２把手付鉢）は、平成６年度に八尾市神武町で行った久宝寺遺跡第18次調査で出土しました。時期的には古墳時代初頭後半、土器形式では庄内式新相に位置付けられるものです。これらは畿内の土師器の土器形式には当てはまらないものであり、朝鮮半島における原三国時代後期から三国時代前期、土器形式では後期瓦質土器から古式陶質土器の時代にみられる土器に、形態・技法等に類似性が認められることが分かりました。また胎土分析によると、この２点は久宝寺周辺で製作された可能性が高く、これらの土器が朝鮮半島の土器を模倣したものであるとすれば、韓式系土器の定義に当てはまるといえます。

１は土坑（ＳＫ206）から出土したもので、爐形土器（Ａ：韓国金海・大成洞29号墳）という土器に類似しています。１は口径16.3㎝・器高12.8㎝を測り、調整はヘラミガキを基調とし、口縁部外面のヘラミガキは連続的で部分的にジグザグ状になっています。肩部には浅い沈線が巡りますが、残存部分の状況からみて全周はしないと思われます。台脚

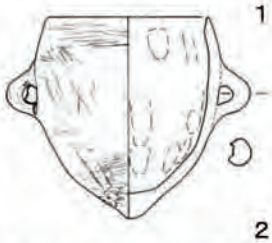
韓式系土器〈久宝寺第 18 次〉
１台脚付短頸壺
２把手付鉢

部には四方に孔を有します。爐形土器の編年に照らし合わせると３世紀後半に当たり、庄内式新相の実年代とほぼ合致するものと考えられます。

この形態の土器ですが、畿内では奈良県天理市平等防・岩室遺跡で一例が見られるのみです(B)。一方、近年の調査では北九州地方で多く確認されており、福岡県福岡市西新(にしじん)町遺跡(C)、同市藤崎遺跡(D)、同県豊津町徳永川ノ上遺跡(E)等があります。Cは形態的により爐型土器に類似しており、Eは久宝寺(1)に近いといえます。これらの事例から、畿内で見られる土器については、朝鮮半島との直接的な関連ではなく北部九州に系譜を求めたほうが妥当ではないかという考えもあります。



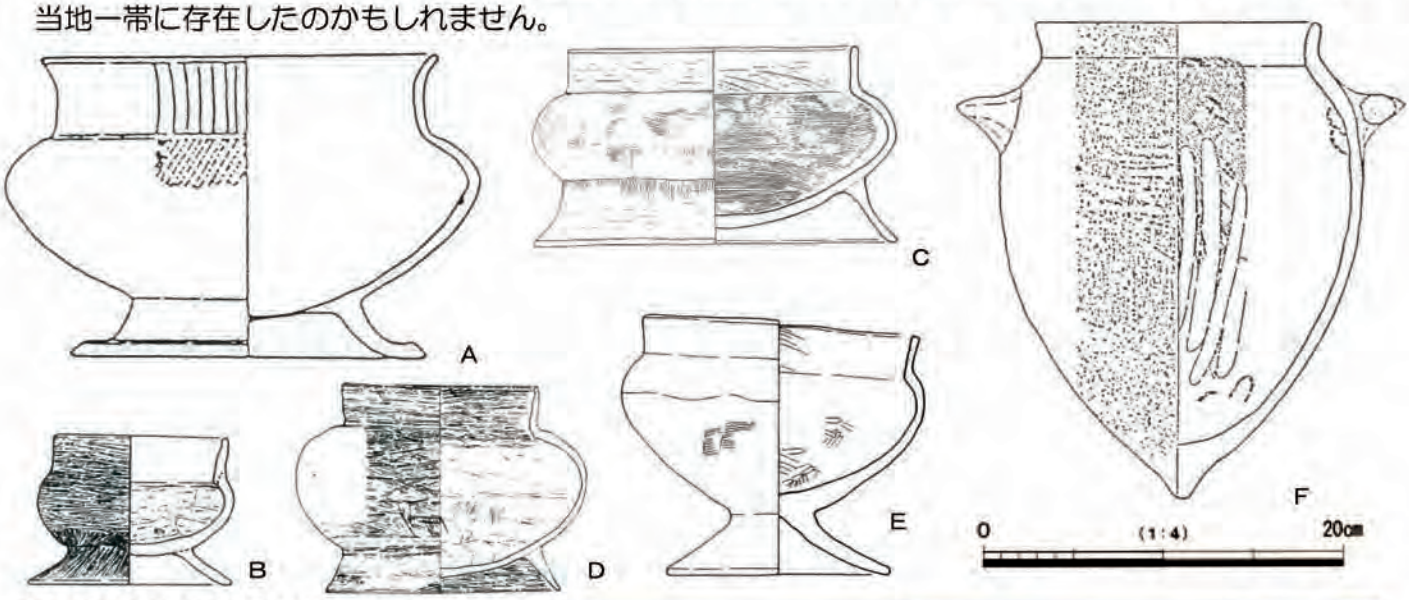
1



2

2は溝(ＳＤ201)から出土した尖底を有する把手付鉢で、軟質両耳甕と呼ばれる土器に類似しています。復元口径8.3㎝・器高10.6㎝を測ります。体部中位やや上には縦方向の環状耳(おそらく一対)を付しています。軟質両耳甕の類例は、韓国釜山(ふさん)・老圃洞(のほどん)35号墳出土品(F)があります。口径15㎝・器高26㎝を測り、耳は瘤状です。このように尖り底形態の甕に環状の耳が付く例は、韓国ではみられないようです。

久宝寺遺跡の西に隣接する加美遺跡では、朝鮮半島から持ち込まれた可能性が高い陶質土器の広口壺が、方形周溝墓(１号墓)の周溝から出土しています。また前号で紹介した古墳時代前期の環形付木製品も、大陸との交流をうかがわせるものですが、出土した第13次調査地は第18次調査地の東約100mにあたります。これらのことから古墳時代初頭～前期頃に、海外と活発に交流していた集落が当地一帯に存在したのかもしれません。



編集後記

諺(ことわざ)に「禍福(かふく)は糾(あざな)える縄の如し」があります。この世の幸不幸は、縄を縒(よ)り合わせたように表裏があり、繰り返し起こることを意味します。永い時間を共有する人生の教訓として、結婚式のスピーチに使われる諺の一つです。

世の中の流れも絶えず幸不幸の連続で、一定なものは無いとする「無常」の世界観に満ち溢れています。

特に今年(2011年)は、大震災、原発事故、台風被害があり、禍だけが目立つ年になりましたが、また福が来る日を願って祈る日々が続きます。〈MH〉

イベント情報

◆平成23年度秋季企画展

「やおの弥生時代Ⅰ ―稲作文化の広がりとくらし―」

期間：平成23年10月5日(水)～平成24年2月24日(金)
時間：午前９時～午後５時、入館無料
休館日：土、日、祝日、年末年始(12月30日～1月4日)

◆講演会

「弥生時代の遺跡から八尾の原風景を探る」

講師：<(財)八尾市文化財調査研究会技師>
日時：平成24年1月22日(日) 午後1時30分～(先着30名、資料代200円)

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌
『八尾・よろず考古通信　第５号』
発行：2011年10月31日、八尾市立埋蔵文化財調査センター
(編集：財団法人八尾市文化財調査研究会)
〒581-0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－2
TEL・FAX 072－994－4700
URL http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun, E-mail: maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp